疾風来り去る

南原幹雄

疾風 来り去る

疾風来り去る

一九八三年二月二五日　第一刷発行

定　価　九八〇円
著　者　南原幹雄
装　画　伴　飈
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三八―二七八一
印刷所　共同印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

©1983 M. NANBARA, Printed in Japan
ISBN4-08-772421-2　C0093　¥980E

目

次

逆さ馬 7
尾行者 16
お玉ケ池 27
七夕祭 40
菊屋敷 51
子鼠小僧 66
父子岳 80
春愁 96
身請け 107
店びらき 123
刺客 135
黒船来たる 155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

横浜村 169
密航 182
衣鉢をつぐ 194
鰯雲 207
神奈川探訪 221
帰り新参 234
銅御殿 246
大獄 260
疾風のごとく 273

掲載　神奈川新聞　一九八一年三月二八日～一二月一一日

疾風来り去る

逆さ馬

上州吾妻郡は雪国である。
郡内はほとんどが山岳地で、わずかに吾妻川や四万川の流域に、山村がひらけている。一年のうちおよそ半分は、山岳から雪が消えない。
まして郡内の西へ寄った嬬恋一帯では、晩春三月の中ごろでも、白根、浅間の両山に雪がのこっている。
白根と浅間の裾野の谷間を、吾妻川（かつての鳥居川）がながれており、その川ぞいに嬬恋の村々は点在している。
中居村も、その一つである。
白い霧がながれ、峰や谷がしだいに姿をあらわしてきた。
四月に入ったばかりの早朝である。
霧のかなたから山鳥の鳴き声がきこえる。
とある山あいの街道に、一人の旅の若者が姿をあらわした。
肩はばはがっしりとひろく、背丈も五尺八、九寸はあろうかという大柄な若者だ。その眸が底ぬけにあかるい。いでたちからいって武士ではないが、凜乎とした風貌のなかでとりわけ眉宇にただよう気位、気迫が、いずれ名ある郷士の末裔であることをものがたっている。
笠も持たず、手荷物もないが、旅風呂敷を一つ、ななめに背負っている。
彼は払暁ごろ中居村の生家をでて、街道を東へむかってきた。この道は信州上田と上州沼田をむすぶ街道で、かつては戦略上の要路であった。今では物資運搬につかわれたり、善光寺参りや草津温泉への遊山湯治の道となっている。
霧がすっかり晴れあがり、近くの山の杉やカラ松、楢などがみえてきた。
北方、白根の峰はまだ雪をかぶっているが、南の浅間の峰は大半の雪がきえている。日のあたらぬ峰の北側の中腹にだけ雪がのこっているのだ。
若者はふと足をとめて、はるばると浅間の峰をのぞんだ。
（逆さ馬……）
峰の残雪は白馬がさかさに駆けている姿によく似ている。
〝浅間に逆さ馬がかかったら、稲の種をまけ〟
嬬恋の村々ではそういいつたえられている。これは、雪国におそい初夏のおとずれをつげるしるしである。
浅間の頂から、白い煙がたなびくように西へむかって水平にながれている。
（今日は晴れる）
と、若者はこの日の天候をうらなった。
煙が下へむかってながれる日は、きまって雨になるのだ。

左　草津

としるした石標のある脇道をすぎたあたりから、若者は今きた道の背後を気にしはじめた。後ろから人が追いかけてくる気配を察したのだ。

若者の眉宇にやや険しさがうかんだが、彼はふりむかず、大股で足をはこんだ。

まだ早朝なので、街道の行く手に人影はない。

が、背後には人の気配がせまっている。それも一人や二人ではなく、察するところ四、五人はいるようだ。

(犬のようなやつらだ)

彼の旅だちをかぎつけて追ってきた連中だろうと推量した。

地蔵堂がすぐ先にみえた。

「おおいっ、待て!」

「待て、武之助っ」

聞きおぼえのある声が追いかけてきた。

若者は二、三歩あるいて、立ちどまった。そしてゆっくりとふりむいた。

男が四人駆けてくる。四人とも腰に長脇差をぶちこんでいる。ご多分にもれぬ上州やくざの風体だ。

「やあ、岩蔵の兄いたち。こんなに早くからどうしたんだね」

武之助、とよばれた若者は屈託のない顔で彼等をむかえた。

岩蔵にしたがっているのは、虎吉、安五郎、仙太郎だ。

「とぼけるな、武之助」

「お前、どこへいく」

虎吉、安五郎の二人がかみつくようにいった。

彼等は草津に縄張りをもつ草津左源太という貸元の身内である。岩蔵は代貸をつとめ、虎吉と安五郎は兄い株で、仙太郎は昨今この道に入ったばかりの若い者だ。

「おれの行き先は、ちゃんと代官所へとどけてある。この上草津の親分の許しでもいるのかい」

歯切れのいい言葉が武之助の口からとびだし、それが相手の怒りをさそった。

「小僧っ、ふざけたことを!」

「お前、親分には中居へかえって、稲の種まきをするといっていたはずだぜ」

岩蔵は三十歳前後で、背丈はないが、おそろしく腕っぷしのつよい男である。牛と格闘をして、ひねりころしたという逸話がある。虎吉と安五郎はいずれも二十代半ばで、草津一帯ではきこえた乱暴者だ。

「おれがどこへいこうと、草津の親分にかかわりはないはずだ」

武之助は四人につめよられても、怖じ気づいた態度はみせなかった。虚勢をはっているわけでもない。むしろ悠々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

と喧嘩の相手をしているのだ。
「お前のほうになくたって、こっちにはあるんだ。武之助、勝手なことはさせねえぞ。今から草津へもどれ」
岩蔵がそういうと、虎吉と安五郎はすかさず長脇差を抜きはなった。コケ威しではない証拠に二人は白刃を身がまえて、間合をはかった。彼等は武之助が年に似合わず尋常でない腕前の持ち主であることをよく知っている。
「腕ずくで邪魔をする気なら、相手になるぜ」
いいざま武之助は二、三歩さがって、懐からすばやく護身用の木身刀をとりだした。長さ一尺余寸、太さ一寸余。漆しあげをした樫棒である。
武之助の家は、中居村で代々名主をつとめている。〝大下の家〟と俗称され、黒岩の苗字をもつ別格の家柄なのだ。しかも、すこし前までは金持ちの家としてきこえていた。
武之助の父幸右衛門は草津温泉に〈山清〉という湯宿まで経営していたが、甲州の金山に手をだして、金蔵にあった金をことごとくつかいはたしてしまった。それで、おなじ草津で湯宿をやっていて羽振りのいい左源太に話をもちかけ金をださせたのだが、結局金山の経営は失敗におわった。
幸右衛門は昨年、中居村を出奔し、山清は人手にわたってしまったが、それでも左源太への負債は整理しきれなかった。左源太は武之助を草津につれていって人質同様にし、子分を旅にだして、幸右衛門の行方を執拗にさがしまわっているのだ。
そうした矢先に武之助が中居村へもどったので、左源太はひそかに岩蔵たちにつけさせたところ、はたして武之助が父についで出奔をはかったしだいだ。
「武之助、あきらめて、おれたちと草津へもどれ。いくらお前に腕があっても、そんな棒切れ一本でおれたちを負かすことはできまい」
岩蔵は余裕をみせて、まだ長脇差をぬいていない。
仙太郎はぬきはなって、武之助の横手へまわった。
彼等は武之助が剣術の達人であることを知っているが、彼の武器が木身刀一本とみて、タカをくくっているのだ。
「おれはいつまでもこんなちっぽけな山国の片隅で、無駄飯を食っているわけにはいかないのだ。ひろい天下へでていって、自分の腕をためしてみたい。力いっぱい、根かぎりのはたらきがしたい。おれがおもいどおりに伸しあがることができたら、親父がつくった借銭などはかるく始末ができる。かえって親分へそうつたえてくれ」
身にせまってくる三本の白刃にたじろがず、武之助は悠然といいはなった。
「小僧っ、小癪なことを」
安五郎は罵声をあびせて、切っ先するどく斬りかかった。
「おれのいうことが、きけないか」

木身刀で難なくそれをさけたが、あと二本の白刃もつづけざまにおそってきた。
一尺余寸の樫棒が何度もうなりをあげて、白刃をはじきかえした。が、相手も多勢をたのんで、なかなか後へはひかぬ。
相手をしているうちに武之助はいらだってきて、木身刀を手元へひいた。そして握りと中程を両手で持ち、ぐいと力をこめると、なんと木身刀が握りのところから二つにわかれた。
「あっ……」
抜き身をかざした男たちが驚きの声をあげたとき、武之助は右手にのこった握りの部分をぐいと前へつきだした。
それは、あたかも銃口によく似た筒になっている。
「な、なんだ」
「妙なもんをだしやがって」
四人のやくざ者は奇妙な武器をむけられて、一瞬たじろいだ。
よくみると、木身刀の握りの部分は鉄でできているようだ。木身刀は本来隠し武器だが、これは二重の隠し武器になっていた。
「ちかづいてみろ、ズドンといくぞ。音が鳴ったら、もう御陀仏だ」
武之助は筒の先を虎吉の胸へむけた。
「そんな短筒があるものか。火縄もついていねえし、引き金だってねえじゃねえか。だまされるな」
岩蔵が後ろから叱咤したが、虎吉は足がすくんでうごけなかった。安五郎も仙太郎も気味わるがって、その筒先に見入った。
火縄こそないが、中に仕込んであったものか、ちいさな引き金のようなものがでている。
「お前たちは知らぬだろうが、火縄をつかう鉄砲などはもう古いのだ。海のむこうの国々じゃあ、もうずっと以前から、火縄をつかわぬ鉄砲がはやっている」
この言葉は彼等にもききめがあった。
黒岩家が代官所からゆるされて、代々火薬を製造し、それが猟師筒や花火につかわれていることは世間で知られている。武之助が少年のころから火薬と銃器の研究にかくべつ熱心であったことも、土地の者は知っている。
「火縄がなくて、鉄砲がうてるものか。うてるもんなら、うってみろ」
虎吉が虚勢をはっていったが、斬りこんでくるだけの勇気はなかった。
そのとき、横手にいた仙太郎の足の爪先が、じりじりっと前へうごいた。
「野郎っ」
さけんで仙太郎が横なぐりに斬りこんだとき、武之助の

体が軽々とななめにとんだ。
ダーン
そのちいさな筒先からは想像できぬ音が轟然と鳴って、山間にこだました。
筒先は空の一角へむいている。が、虎吉は肝をうしなって、その場にへたりこんだ。
岩蔵、安五郎、仙太郎は一瞬のうちに数間も先へ逃げていた。
武之助だけが元いた場所に立っている。
彼の顔は空をあおぎ、視線は空中の山鳥を追っていた。
山鳥は二、三間ななめ上にはじけとんで、急速に落下し、吾妻川のながれる谷底へ墜落していった。
武之助は筒をおさめ、元の木身刀にもどして懐中にしまった。
虎吉が這うように逃げていくのが視界の片隅にうつったが、ほうっておいた。
彼の眸はもう、元のあかるさにもどっていた。
右手かなたには、浅間の峰がくっきりとみえる。武之助はもう一度、逆さ馬を眸におさめた。
子供のころからみなれた光景だが、今度いつこの光景をみるだろうか、と一瞬おもいながら、ふたたび街道をあるきだした。

武之助が二十歳にして生地を出奔しようと決意したのは、父が没落させた黒岩家を再興するためだけではなかった。
山間の村をとびだして、ひろい世界で自分の力量をためしてみたい、という青年らしい志とはげしい野心があった。
そのためには、
（まず、江戸へ！）
と、たぎる血潮をおさえかねて、左源太をあざむき、村をでたのだ。
すぐる天保の飢饉いらい、吾妻郡でも、不図出者といって農業をきらって江戸へあこがれてでていく若者がふえていたが、武之助の場合はそれとはちがっていた。
彼には、昨年縁組をしたばかりのおみやという妻がいる。その若い妻をおいてまで江戸へむかわせるほど彼の志は壮大であり、またはげしかった。
そして、彼はまだ弱年ながらも、あまりにおおくの才にめぐまれすぎていた。学問でいえば、儒学、蘭学、医学、薬学、天文学……にまで関心があり、彼の勉学はそれぞれにおいて相当なレベルに達していた。また武芸でいうと、剣術、銃術において水準をこえていたし、柔術のこころえもかなりなものであった。学問であれ、武芸であれ、このうちからどれをとっても、今後それで身をたてていくだけの自信があった。
さらに父が湯宿をやっていたのを幼いころからみてきた

ので、彼には商人として生きる道もひらけていた。
（おれは、どう生きる？）
（何になるべきか……）
この答をだすためにも、江戸へでるべきだとおもったのだ。
江戸は文化文政期いらいかつてない繁昌をきわめている。絢爛たる文化が咲きほこっており、一流の文人や学者、武芸家がひしめいている。彼はそのなかに伍していって、自分をみがき、自分をためしてみたかった。
草津の温泉は名湯として評判がたかく、江戸からの湯治客もおおい。父が経営していた山清はとりわけ、文人や学者などに人気があって、江戸から名のある客がいつもきていた。
父の幸右衛門自身が田舎にはめずらしいくらい高い教養と学識を身につけた人で、金山にくるうまでは、〝墨峰〟と名のって、画道では相当人に知られていた。
武之助が幼いころから学問や武芸に興味をいだき、江戸文化にあこがれをもったのは、父の影響と、山清に逗留にくる人士たちと身近に接する機会がおおかったからである。
彼は山あるきになれていたので健脚である。
その日の夕刻、中仙道・高崎につき、木島屋という旅籠に宿をとった。
十数里の道のりをきたうえ、その大半が山道だったので、さすがにやや疲労をおぼえ、夕餉のときの銚子で眠気をおぼえた。
武之助を追ってきた客が木島屋についたのは、その後刻である。
客は、駕籠で追いかけてきたものらしい。
「上州吾妻郡、中居村の武之助という者が泊まっておりますでしょうか」
客は帳場まできて、番頭にそう問いかけた。丸髷をふっくらとゆいあげた上品な顔だちの若妻である。年はまだ二十歳にもとどくまい。顔だちのはっきりしたうつくしい女だ。
番頭は宿帳をめくって、
「そのお客さんなら、二階に泊まっておりますよ」
とこたえた。
番頭がじろじろとぶしつけにみるので、
「わたしは武之助の女房で、みやといいます。夫に用がありますので、お部屋へあがらせてください」
女は自分の素姓をあかした。その顔にはさしせまった色がういている。
「ではちょっと、二階へおしらせにいってまいります。しばらくお待ちください」
女房だと名のられても、ただちに通すわけにもいかないので、番頭は店先にいる女中に目くばせをした。

女中は階段をあがっていって、しばらくしてからもどってきた。
「お客さんはもうお休みになっておりますが、あがってくれとおっしゃってます」
女中にそういわれて、おみやは草鞋をといた。
彼女は今朝おきて、武之助がいなくなっているのを知り、ついで自分あての置き手紙を発見した。
『おもうところがあって、郷里をでて江戸へいくことにする。はなはだ勝手ではあるけれども、留守はお前にあずかってもらいたい。江戸へついたら、すぐに便りをする。くわしいことはそのときに……』
要約すると、そんな文面であった。
そして、手紙のそばに金十両がつつんでおいてあった。
おみやはとるものもとりあえず簡単な旅仕度をして、駕籠をとばしてやってきたのだ。
武之助の健脚ぶりから、今日の泊まりを高崎と察し、宿は幸右衛門が江戸へのいききにつかっていた木島屋に見当をつけたのが的中した。
武之助は寝巻の浴衣姿で、おみやをむかえた。
この時刻に来客をつげられて、彼は今朝おどしつけた左源太の子分たちかと想像していた。
女房だとわかって、安堵するとともに、おもたい気分におそわれた。女房が追いかけてくるとは、まったく予想していなかった。
いったんおもいきって郷里をとびだした以上、もうひきかえすことはできぬ。できることなら、だまって旅立たせてほしかった。
おみやは、ひっそりと座敷に入ってきた。
「おまえ」
なんとなく不機嫌な顔で女房へ声をかけた。
おみやは木島屋へ入ってきたときの緊張した色はなく、顔に笑みをうかべていた。
「だまっててきて、すまなかった」
詫びの言葉がはじめに武之助の口にのぼった。
「相談されたら、いかないでくださいと恐らく泣いてたのんだでしょう。でも今からでは、どうしようもありませんもの」
おみやは笑みをたやさずにこたえた。
その余裕のある態度をみて、武之助はこころがややかるくなった。
ここで女房に泣かれでもしたら、彼の旅立ちは出だしでつまずくことになる。
(えらい女だ)
このとき武之助はしみじみとおもった。年はまだ十八だが、腹のすわった女だと感じた。
「ところで、何の用だ」

感情をみせまいとしてたずねると、おみやは懐中に手を入れた。
「あなた、わすれ物です」
取りだしたのは、金十両入った金包みである。
「それは、お前においてきたものだ。くらしの足しにしてくれ」
「わたしは家におりますから、くらしはどのようにでもたちます。あなたのほうこそこれから江戸へでていって、懐ぐあいはさびしくはありませんか」
「おれも懐に十両あるんだ。これだけあれば、どこへいってもまず当分は大丈夫だ。心配するな」
以前の黒岩家には、金蔵のなかに千両箱がいくつもつみかさねてあったが、没落してからとついできたおみやは、一度に十両の金を手にしたのははじめてのはずである。
「でも旅先ではお金はいくらあっても邪魔にはなりませんでしょう」
「おれのことなら心配はない。おまえのほうこそ、金がなければこころぼそいだろう。当分は、江戸から仕おくりもしてやれぬ。もってかえれよ」
武之助は金包みをおしもどした。
この金と彼がもってきている十両とは、旅立ちを決意したときにみつけた金だ。
出奔した父はいく先々の地から、折にふれて家へ便りをよこしてきた。武之助が将来大成するためにはぜひ江戸へでてくることが必要だと、再三にわたって手紙で彼にすすめていた。今年正月京からきた父の便りで、彼は旅立ちを決意したのだが、そのときの手紙に、
『旅の路銀は心配しなくともよい。納戸の長押をよくさがしてみろ。こういうときがあろうかと、つかわずにのこしておいた金がわずかだがある。それをもって江戸へでよ』
といった意味の文字がつらねてあった。
長押のなかには、金二十両の包みがあった。武之助はそのうち半分をおみやにのこし、のこりを懐にして旅立ったのだ。
若い夫婦はゆずり合ったが、おみやが根負けして懐にもどした。
「今夜はここに泊まっていけ」
今からでは夜駕籠も、中居村まではいってくれぬ。
はからずも、ここで別れの一夜をおくることになった。
おみやが湯に入っているあいだに、女中が夜具をならべて敷いてくれた。
部屋のなかに、女の匂いがたちこめた。
湯あがりのおみやがもどってきたのだ。
なつかしい匂いだった。
妻とはいっても、武之助がおみやとともにすごした月日は半年にもみたぬ。縁組をしたのは昨年四月だが、その後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.